

ともあつたが、更にまた一方では東部の新王イリアスとも絶えず戦を續け、然もその間に、全く士心を歸服させることが出来た。千三百六十九年には唯一人の敵手たるフサインをも攻め滅ぼして、茲に彼は全くトランス・オキジアナの地を統一してしまふことになつたのである。

六 帖木兒の創業

自分は帖木兒が後年大事業を成すに至つた地盤を固めた次第を語らうとしたのである。今フサインを亡ぼして軍はまだ其の戰場なるアム河の南方、ヒンドクシュ山脈の北バルクの都に滞在して居る中に、彼は莊嚴なる儀式によつてマブラ・ウン・ナール侯の位に上つた。正に千三百六十九年四月八日のことである。マブラ・ウン・ナールといふのは回教徒がトランス・オキジアナの地を呼んだ名で、侯といふのはアミールといふ言葉の翻譯の積りである。彼は終生決して王即ちトルコ語、蒙古語などで汗といふ號をとらなかつた。尤も此の儀式の際に部下からサヒブ・イ・キランといふ尊號を奉つたことが傳へられ、『戦勝記』などには始終此の名が見えて居る。サヒブは王、イは「の」、キランは星の交會 (Conjunction) のことで、即ち星の交會の際世に出づる王といふ意味の波斯語である。波斯地方ではアブラハムでもモーゼスでも、其の他ゾロアスター、クリスト、モハメットなどいふ偉い人は、皆星の交會の際に世に出でた人と信ぜられて居る。則ち帖木兒をもまた此の名によつて尊んだものである。しかしこれは決して彼自身の用ゐた名ではなく、彼はたゞアミールなる稱を用ゐ、またベク即ち首領と稱するにすぎなかつたのである。